人と街の未来予想図 湯島ビジョン2020

2020年、そしてさらなる未来に向けて、東京は大きく変わろうとしています。その中で私たちの街、湯島はどうあるべきなのでしょうか。みんなで明るい湯島の将来を語りましょう。

「上野スクエア構想」が描く将来像

開かれた湯島を目指して！

上野スクエア構想とは

美術館、博物館、ホール……上野の森には都内でも屈指の多様な文化施設があり、多くの人でにぎわっています。そうした「施設」だけではない文化資源が、上野地域の街という「場所」にもふんだんにあるのではないか。また、こうした発想から新たな街づくりを考えていこうと未来図を描いているのが「東京文化資源会議 上野スクエア構想」です。その検討委員会の座長を務める東京大学大学院 都市デザイン研究室の中島直人准教授の話を中心に「上野スクエア構想」の概要に迫ります。

私がご案内します

上野スクエア構造検討委員会　座長
東京大学大学院工学系研究科
都市工学専攻　都市デザイン研究室
中島直人 准教授

上野・湯島の魅力を掘り起こそう

2016年から東京23区東部の魅力活性化を目的に始まった任意組織 東京文化資源会議。東京23区の東部といえば、浅草や日本橋など、歴史と伝統があり、独自の魅力をもった街や地域が多く、同会議が提唱する東京文化資源区の中心に上野地域が位置しています。しかも上野は、成田・羽田の両空港と1時間以内で結ばれていて、いわば東京文化資源区の玄関口でもあるのです。

「今、大手デベロッパーの手で大規模な再開発が進んでいる地区などは、それはそれで東京の将来像の一つとして考えられていますが、逆にいい意味で大規模再開発の波が起きていない上野地域は、昔からの伝統が残り、地域で活動されている老舗の方々や、何より文化系の人たちが集い、東京の文化資源が折り重なった、大事な場所です。そこから、新たな街づくりや、街の味わい方、そしてライフスタイルが実現できないかということから、この構想はスタートしました」（中島准教授）。

その基本コンセプトは、「施設」ではなく「場所」にあります。

美術館や博物館を訪れる人は多いが、その行動範囲は「施設」で完結しています。言い換えれば、上野の森（山）から下りて街を回遊しない。それを「閉ざされた文化資源」と定義すれば、上野地域の南側に着目し、「開かれた街の文化資源」として、それを掘り起こそうというのが「上野スクエア構想」です。

まず、不忍池を頂点に、南におりて仲町通りを経て、西の湯島天神、東の御徒町&広小路（パンダ広場）、そして真っ直ぐ南下してアーツ千代

田3331（外神田）で囲まれた四辺形のエリア。このエリアを縦横に貫く2本の道として「吹貫（ふきぬけ）横丁」と「学問のみち」をクローズアップしています。

上野・湯島を開かれた街にするための2本の道路がつなぐ4つのスポット

4つの端点と2本の対角線からなる菱形の領域が「上野スクエア」を構成する。不忍池、湯島天神、パンダ広場、アーツ千代田3331という4つの「開放系の文化資源」が、各要素の個性から地域の多層的な様相を生み出すエンジンとなる。そして学問のみちと吹貫横丁という2本の軸が「上野スクエア」を貫く。

不忍池

上野公園の不忍池に注目。空間的に街と直接する部分が多いのが特徴。都心で数少ない水辺空間でもある

湯島天神

菅原道真公を祀る神社で、街の重要な文化資源でもある。例大祭や梅まつりなどの地域とのつながりが深い

パンダ広場（上野広小路）

御徒町駅前にあるパブリックスペース。周辺は松坂屋やアメヤ横町など商業地のにぎわいがある

アーツ千代田3331

練成中学校をリノベーションしたアート施設で、地域を巻き込んだ新しいアートの拠点を目指している

街の魅力を発信するには課題も多い

ここからはゾーンごとに文化資源の特徴を見ていきしましょう。

まず不忍池。上野公園そのものが「開放系文化資源」で、不忍池は空間的に街と直接面しており、歴史的にも上野の街の人たちが守り、憩いの場として親しんできた場所です。都心で唯一の街場にある稀少な池空間でもあります。

湯島天神は「学問の神様」として、そして地域とつながった行事・祭事を通じて、湯島の精神文化を象徴、複数の入口を擁し、あらゆる方向から境内を訪れることができます。

御徒町&広小路は商業ゾーンといえるでしょう。戦後復興期の闇市を由来とするアメヤ横丁は全国的にも知られ、買い物をしてもしなくても楽しめるという意味で、まさにオープンな文化資源で、巡り歩く楽しみも提供しています。また、江戸以来の歴史を誇る松坂屋は、昨年、新装増築して商業のみならず多様なアクティビティを提供しています。

そしてアーツ千代田3331は、旧練成中学校をリノベーションし、第一線で活躍するアーティストやクリエイターが集う新しいアートの拠点となっています。

それぞれが有機的につながることで、相乗効果も期待でき、上野の街の魅力が発信できるわけですが、もちろん現状では課題が多いのもまた事実です。例えば不忍池。

「不忍池の利用調査を現地で実施しましたが、うまく活用されているとはいいにくい現状が浮き彫りになりました。特に夜を楽しんでいる人はいません。水上音楽堂もかつてはステージと客席が逆に位置し、客席から池を眺めることができましたが、ステージの音響が街中にもれるということで今のようになりました。ふだん池の周りを散策する人にとっては、植栽とフェンスが、閉じた音楽堂の印象を与えています。近年は池の西側にマンションが建ち並んでいますし、その住民がもっと気軽に池の周りを散策できるようなデザインが必要でしょう。ある意味、この一帯は観光的な空間と生活空間が重なり合っていて、それが上野の面白いところでもあります。観光客にも生活者が楽しんでいる街を見たいという欲求が増えていますし」（中島准教授）。

会議の際に使用した大きなマップには書き込みがびっしり。熱い議論が繰り広げられた

湯島の文化資産見直す動きを

湯島地域では、地元のまちづくり協議会が整備を検討している「学問のみち」を推進し、天神様の裏参道としての文化資源を高めるとともに、御徒町駅と湯島天神を結ぶ道をゆったりとした回遊性をもたせることで、湯島から仲町通りを経て不忍池や、春日通りをはさんで天神様の向かいにある湯島ハイタウン、さらには旧岩崎邸への動線につなげようという一プランが構想されています。

さらには、天神下には風情豊かな横丁空間が残っていて、観光地化されていない飲み屋横丁もある。そうした隠れた文化資源を活用するのも一つの方向でしょう。

当面は2020年の東京オリンピックの文化プログラム「東京ビエンナーレ」に向けてという構想もありますが、その前段階で現在空きフロアが出始めた仲町通りで、アートを切り口に制作、インスタレーション、発表の場としてみんなが楽しめるような街ぐるみのプランが具体化されようとしています。

その先に「上野スクエア」はどのように進化し、さらに深化して、上野が、湯島がその姿をどう変えていくのか、見守っていきましょう。

湯島地区のここが惜しい！

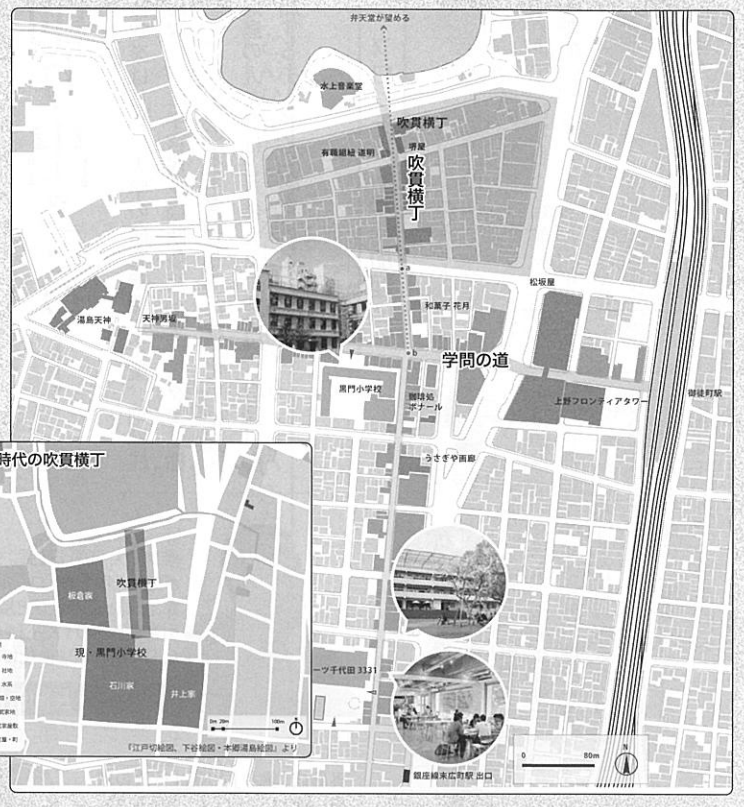
中央通りに面したビルの駐車場の入り口が多く見受けられ、吹貫横丁に対して背を向けているように見える

湯島駅と不忍池を分断する不忍通り

池之端一丁目交差点では、南西の街区からは二度信号を待たないと不忍池に出られないなど回遊性を低下させている

湯島天神が見通しにくい学問のみち

学問のみちはいわば湯島天神の裏参道だが、見通しが悪く湯島天神へと誘われるという高揚感が得にくい



回遊性を向上させる上野と湯島を一体化した新しい街作り

提案の一つが吹貫横丁の見直し。吹貫横丁は黒門町と仲町の間にある江戸時代以来の由緒ある横丁で、池からの風が吹き抜けることからその名が付いたという。現在は他の幹線道路に埋もれてしまっているが、アーツ千代田3331から不忍池に抜ける貴重なルートだ。学問のみちと連携して整備を進めていくことを提言している。